

外国語教育メディア学会 (LET)

第 41 回 (2011 年度) 九州・沖縄支部研究大会

研究発表要綱

2011 年 6 月 4 日 (土)

筑紫女学園大学 1 号館

《プログラム》

09：30～	受付・登録（1号館 1階 ロビー）
09：50～10：40	ワークショップⅠ（1号館 2階 1202教室） 『ICT活用で、頭が動く、心が動く外国語活動を』 講 師：前田 陽子（熊本大学教育学部附属小学校）
10：50～11：40	ワークショップⅡ（1号館 2階 1202教室） 『児童の心を育む外国語活動とは？—「英語ノート＋アルファ」』 講 師：高橋 美由紀（愛知教育大学）
11：50～12：40	支部評議員会（1号館 2階 1201教室）
10：00～	展 示（1号館 2階 ラウンジ）
12：50～13：05	開 会 式（1号館 3階 1301教室） 総合司会： LET九州・沖縄支部副支部長 樋口 晶彦（鹿児島大学） 開会の挨拶：LET九州・沖縄支部長 島谷 浩（熊本大学） 会場校挨拶：筑紫女学園大学 学長 小野 望
13：10～14：10	講 演（1号館 3階 1301教室） 司 会： LET九州・沖縄支部副支部長 石井 和仁（福岡大学） 演題：これで大丈夫！ 小学校「外国語活動」 金森 強（松山大学）
14：10～14：30	支 部 総 会（1号館 3階 1301教室）
14：40～16：20	研究発表・実践報告（第1～第2室） 第1室（1号館 2階 1202教室） 司会：安浪 誠祐（熊本大学） ・川北 直子（宮崎県立看護大学）
14：40～15：10	デジタル教材を利用する為の機器所有状況とデジタル環境利用の研究 —長崎県立大学の学生を例に 内田 智子（長崎県立大学佐世保校）

15：15～15：45 実践的英語スキル向上に向けたオンライン CALL 教材の有効性
冬野 美晴（西南学院大学大学院生）

15：50～16：20 音声ファイルを媒体とした英語発音実技試験の有効性について
松崎 徹（筑紫女学園大学）

第2室（1号館 2階 1203教室）

司会：志水 俊広（九州大学）・柏木 哲也（北九州市立大学）

14：40～15：10 生徒の英語学習意欲に関わる教師要因 高校生の場合
渡邊 正隆（専修大学玉名高等学校）

15：15～15：45 A Needs Analysis: How Teachers Perceive Teacher Training for English Education
at Elementary Schools
KAWANAMI, Sachiyo (Kurume University)
KAWANAMI, Kazuya (Ohori Senior High School)

15：50～16：20 Baby car, My car, Open car —Foreign Loanwords, Japanese English and Native
Speakers' Ability to Distinguish Between the Two
CRESCINI, Anne (The University of Kitakyushu)

16：20～18：00 シンポジウム（1号館 3階 1301教室）

テーマ：こうすればできる！ 小学校外国語活動

コーディネータ：高橋美由紀（愛知教育大学）

コメンテータ：金森 強（松山大学）

パネリスト：池浦 真理（元福岡市立小学校教諭・

「英語で楽しむ紙芝居研究会」代表）

橋口 公一（福岡教育事務所教育指導室・主任指導主事）

前田 陽子（熊本大学教育学部附属小学校）

18：00～18：10 閉 会 式（1号館 3階 1301教室）
次期支部研究大会開催校挨拶 竹野 茂（宮崎公立大学）

18：20～20：00 情報交換会《飛翔会館 1階 カフェテリア食堂》
司会 大会実行委員 大藺 修一（九州産業大学）
與古光 宏（九州産業大学）

■ ワークショップ I

▶ 09:50～10:40 (1号館 2階 1202教室)

『ICT活用で、頭が動く、心が動く外国語活動を』

講師：前田 陽子（熊本大学教育学部附属小学校）

新たに必修となる外国語活動には、二つの内容（外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ること、日本や外国の言語や文化について、体験的に理解を深めること）が示され、外国語に触れさせながら、英語だけでなく日本語も含めた言葉への気付きを促すことが求められている。そこで、英語に触れながら学ぶ中で、次の2点において活動のあり方を考えていく必要がある。

- 日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと
- 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、国によって多様なものの見方や考え方があることに気付くこと

週に1回の活動で、どのような体験をさせていくかを吟味していく必要がある。ここにICTが、子どもの学びを深めるものとして、大きな役割を担っている。まず、普段の活動ではプレゼンテーションソフト（keynoteやpowerpoint）を使って作成した教材で、「考えながら、つい英語でつぶやいてしまう」活動等を紹介する。例えば、プレゼンソフトの映像をもとに、世界のポストに注目させ、その色を当てるクイズを行う。しかし、小学校で担任をしていると、教材の自作もままならないものである。そこで、現在どの学校にも導入されつつある電子黒板を活用し、市販の教材もどんどん使っていくこともお勧めしたい。

時には、外国語活動と総合的な学習の時間をコラボさせたプロジェクト学習に取り組むのもどうだろうか。デジタルストーリーテリングやビデオ番組作りを通して留学生との交流を楽しむことで、「言葉そのものへの関心」や「人と関わる楽しさ」を図るなどの活動は、高学年の子どもたちの知的好奇心や探究心を高めるのにうってつけである。その方法と実際の子どもの様子も紹介したい。



■ ワークショップⅡ

▶ 10:50～11:40 (1号館 2階 1202教室)

『児童の心を育む外国語活動とは？ — 「英語ノート＋アルファ」』

講師：高橋 美由紀（愛知教育大学）

今年度から導入された新学習指導要領では、「生きる力を育むための教育」を行うことを目的としています。そして、小学校外国語活動は、以下の趣旨から新設されました。

- (1) グローバル化した現代社会での異文化共生による外国語教育の充実
- (2) 各学校段階に適切な教育内容による英語開始時期の見直しを踏まえた上でのコミュニケーション能力の育成
- (3) 義務教育としての教育の均等の確保や中学校との円滑な接続等

外国語活動の目標としては、児童に「言葉」に興味・関心を持たせること、そして、「言葉」を尊重する態度を習得すること、さらに、外国語と日本語の両方の「言語力」を習得することが挙げられます。また、外国語活動は、中学校の外国語科で「英語」を履修することが原則とされていることと同様に、小学校でも英語を取り扱うことが適当であると言及されています（文科省 2008:3-5）。

本講演とワークショップでは、外国語活動の目標に基づき、異文化を理解し、国際社会で通用するための人間育成として、外国語活動のあり方を考えたいと思います。そして、児童の心を育むための活動を通して、児童にとって効果的な活動内容を、ワークショップ形式で参加者の先生方に体験して頂こうと思っております。

具体的には、『英語ノート』を活用し、さらに、『英語ノート』に、次の内容をプラスした活動を行います。

1. 言葉への興味・関心が持てる外国語活動とは？－はじめに異文化共生時代の「ことば」＝国際共通語としての英語、次に、世界の言葉について児童に「気づき」を与える活動、「ことば」って面白い！、「ことば」を使っのコミュニケーションの大切さ、等を具体的に紹介します。
2. コミュニケーション能力の素地を養い、外国語と日本語の「言語力」を育成するための外国語活動とは？－学習指導要領を読み解き、それに基づいた活動のあり方を考えるとともに、「言語力」の育成を目指した外国語活動について紹介します。
3. 中学校英語教育へ繋ぐための外国語活動と、評価規準を意識した外国語活動のあり方－小学校外国語活動から中学校英語教育への円滑な接続を目指して、「評価規準」を意識した外国語活動のあり方を紹介します。

ワークショップ形式で、実際に活動をしながら、その活動の背景にある学習指導要領や教授法等の理論的な話をしたいと思います。また、『英語ノート』の電子黒板教材やメディア教材の具体的な活用例について、さらに、電子黒板教材の留意点についても紹介します。

■ 講 演

▶ 13：10～14：10（1号館 3階 1301教室）

司会：LET九州・沖縄支部副支部長 石井 和仁（福岡大学）

これで大丈夫！ 小学校「外国語活動」

金森 強（松山大学）

今日は、「外国語活動」実施に関する様々な問題点と課題を明らかにすることで、より良い実施のためのポイントを提案したい。

今回の学習指導要領改訂に伴い、英語教育への関心が一層高まってきている。特に小学校における「外国語活動」の導入は、高等学校での主に英語で行う授業の実施と同様、英語教育のパラダイムシフトにつながる契機になると期待されている。

一方、小学校における「外国語活動」実施においての課題は山積している。既に「外国語活動」が実施される高学年の担任を渋る教員が出ているという声さえ聞こえてきているが、このような状況は、裏を返せば教材の不足や教員研修の不十分さの表れでもある。導入の際に中央教育審議会外国語専門部会で約束された実施のための条件整備は、十分に整えられているとは言えないようである。

地域行政の中には、担任の負担を軽減するために外国人講師や外部日本人講師の雇用措置を取ることを進めているところもある。ただし、表層的な問題回避は、抜本的な取り組みを遅らせるにすぎない。外国人講師の雇用契約上の問題から、「ティーム・ティーチング」ができない事態も発生し、結果として望ましい「外国語活動」の本来の趣旨を歪めることになっている。

担任教師が学習指導要領の目標や内容について十分な理解をしていない場合も少なくない。児童の実態を考慮せずに『英語ノート』をそのまま指導するだけに終始しているところもあれば、「外国語活動」を教え込みやスキル重視の「早期英才教育」と勘違いしている場合もあるようである。

小中連携を考える場合、中学校における英語教育との直接的な連携を求めるために「英語科」の色合いが強くなってしまい、小学校段階における「外国語活動」の意義が薄れてしまっているケースもある。

さらに、学習指導要領の目標と指導内容から生まれるべき評価規準の構築も上手く進んでいない様子も見られる。このままでは指導と評価の一体化を目指すことは困難であり、「一見活発な授業であっても、それぞれの活動のねらいや、目指すべき児童の姿が漠然とした、中身の無い授業」の蔓延を避けられない。よりよい教育実践につなげるためには、具体的な評価規準をしっかりと考え、「外国語活動」の目標に応じた指導ができるよう準備する必要があるだろう。

新学習指導要領における小学校「外国語活動」の導入、および中学校、高等学校の英語教育は「言語教育・外国語教育政策」として捉えるべきである。それにより、各段階における目標や意義、なすべきことがより明らかになるはずである。

■ 研究発表・実践報告（第1室）

▶ 14：40～16：20（1号館 2階 1202教室）

司会：安浪 誠祐（熊本大学）

司会：川北 直子（宮崎県立看護大学）

▶ 14：40～15：10

デジタル教材を利用する為の機器所有状況とデジタル環境利用の研究

— 長崎県立大学の学生を例に

内田 智子（長崎県立大学佐世保校）

ここ2、3年の携帯端末市場はスマートフォンの参入をきっかけに大きく変わってきている。学生の中にも従来の携帯電話に代えて、あるいは2台目の携帯電話としてスマートフォンを持つ者が出てきている。従来からCDの曲やpodcastを聞くためにiPodやウォークマンを所有する学生はいた。しかし今ではこのようなポータブルデジタルプレーヤーに加えて、テキスト、ビデオ、オーディオなどマルチメディアを使用できる携帯機器を学生が所有するようになって来たのである。

本発表ではまず、平成23年4月に3年次生となる学生約40名について、彼らがどのような機器を所有するに至ったかを、入学時とその1年半後に調査した時の結果から分析してみる。また、携帯電話やポータブルデジタルプレーヤーのような機器のみならず、大学内外でのインターネット接続の有無や機器使用状況の変遷についても同時に分析する。

彼らの多くは、当初勉学のためにこれらの機器を購入したわけではなかった。学習のためのツールは、まず学習という目的があって、それを達成するために購入するのが鉄則である筈であるが、ポータブルデジタルプレーヤーやスマートフォンのように、様々な機能を備えた機器の場合は、学習以外の目的のために購入したものを勉学でも使用する、という使い方が可能になってくる。また、せっかく持っているのだから様々な活用方法を探ってみよう、という気持ちにもなりやすいと考えられる。

インターネットやポッドキャストを利用して英語を学習することにより、語学学習で重要な、一定以上の学習時間の確保やモチベーションの持続がやりやすくなる。スマートフォンの本領であるマルチタスキングや隙間時間の活用は、語学学習においても重要な役割を果たすと思われる。

本発表では、ポッドキャストや、スマートフォンのアプリなど、無料で利用できるものを活かした英語学習の進め方についても、具体的に例を挙げながら紹介する予定である。

実践的英語スキル向上に向けたオンライン CALL 教材の有効性

冬野 美晴（西南学院大学大学院生）

日本人の実用的英語スキルの向上が急務とされる昨今、文部科学省による「英語が使える日本人」構想の下、学校英語教育におけるコミュニケーション型指導への取り組み、SELHi 事業の実施、小学校外国語活動の導入など、さまざまな取り組みが行われてきた。また、大手国内企業の社内英語公用化や外国人採用増加が相次いで報道され、学生の英語に対する意識も高まってきている。

このような状況の中、近年は CALL 教室の普及によって、一斉授業においてもスピーキング能力・リスニング能力向上のための演習が効率よく行えるようになった。それに伴って、社会・学生からの実用的英語スキル向上に対するニーズに応えつつ、自律した学習者への成長を支援するような CALL 演習の中身を明らかにする必要性が増してきた。そこで、本研究の目的は、Web ベースの英語学習教材を使用した CALL 演習の実施と、学生への質問紙調査結果を基に、教材の有効性を探り、日本人英語学習者が CALL 教材・演習に求めるファクターを考察することである。

本調査では、Web ベースの CALL 教材を用いて、中級レベルの英語学習者を対象に、大学の 90 分講義の中の 30 分程度を使い、6 回にわたって CALL 演習を実施した。1 回目の終了後と、最終時 6 回目の終了後に、質問紙を用いてアンケートを行った。1 回目終了時のアンケートにおいては、学生の教材に対する印象を調査し、6 回目終了時のアンケートにおいては、実施を通しての評価を調査した。なお、どちらのアンケートにおいても、選択式の項目と自由記述式の項目を設けた。

次に、各アンケートを集計し統計分析を行った。自由記述項目については、WordMiner を用いてテキストマイニングにかけ、コレスポネンシ分析と構成要素のクラスター化を行うことで、学生の意見を分析した。オンライン CALL 教材使用に関する実践や研究は、これまであまり行われていないが、本調査の結果、学生による評価が非常に高いことがわかった。学生は教材に対しておおむね好意的で、演習を楽しんで行ったことが明らかになり、オンライン CALL 教材の利用が、学生の英語学習に対する内発的動機づけと自律支援に有効であることがわかった。

音声ファイルを媒体とした英語発音実技試験の有効性について

松崎 徹（筑紫女学園大学）

本実践報告では、筑紫女学園大学英語学科 1 年生必修科目 **Pronunciation** における MP3 エンコーダーを媒体とした実技試験方法についてその有効性と今後の課題について報告する。

Pronunciation の授業は前期を **Pronunciation I**、後期を **Pronunciation II** とに分け、前期では主に単音の発音指導、後期はリズムとイントネーションに重点を置いた短文読みの指導を行っている。各学期末時点での受講生の習熟度を測る試験方法として、2009 年度前期より本学園の LMS（**Learning Management System**「学習管理システム」）である『筑女ネット』を媒体とし、MP3 エンコーダーで一斉録音した音声ファイルを講師に提出する形式で実技試験を実施している。提出された各音声ファイルに対しては、講師が評価およびフィードバックを施した評価票を作成し、約 2 週間後に『筑女ネット』を通じて受講生ごとに評価票を配信することになっている。

本報告では、過去 2 年間計 4 回実施した試験の音声ファイルおよび評価票のサンプル等を紹介しながら、英語発音指導クラスの実技試験手段としての音声ファイル形式の有効性について述べることにしたい。その中で特に従来のオーディオテープへの録音および提出形式と比較した場合のより高い利便性について言及する予定である。併せて、試験のみならず普段の授業における実技指導の中に取り入れていくうえで、その可能性と課題についても触れてみたい。

■ 研究発表・実践報告（第2室）

▶ 14：40～16：20（1号館 2階 1203教室）

司会：志水 俊広（九州大学）

司会：柏木 哲也（北九州市立大学）

▶ 14：40～15：10

生徒の英語学習意欲に関わる教師要因 高校生の場合

渡邊 正隆（専修大学玉名高等学校）

本研究の目的は、英語教師が日常、生徒に与える英語の授業の中で、英語学習意欲（意欲上昇・意欲低下）に影響を与える教師側の原因とは何であるかということを検討することである。特に、生徒の「英語授業に対する姿勢」「英語学習に対する姿勢」「英語学習努力」これら3つの生徒要因には、異なる教師要因が関与する可能性のあることから、それらを別々に扱い、それぞれに影響を与える教師要因を識別することを目的とする。高校生468名に質問紙調査を実施し、英語担当教員についての31項目、及び生徒自らの「英語授業に対する姿勢」「英語の学習に取り組む姿勢」「英語学習努力」各4項目について5段階のLikert尺度での回答を求めた。教師に関する31項目への回答を因子分析（主因子法、プロマックス回転）にかけ、4因子を抽出した。それぞれ「きめ細かな指導」因子、「強圧的な姿勢」因子、「過度の干渉」因子、「優しい態度」因子と命名された。次に、教師に関わる各因子と生徒の「英語授業に対する姿勢」「英語学習に対する姿勢」「英語学習努力」との関係を相関分析および重回帰分析により検証した。重回帰分析は強制投入法による。解析の結果、「英語授業に対する姿勢」と「英語学習に対する姿勢」には、「きめ細かな指導」因子がプラスに関与し、「強圧的な姿勢」因子が、マイナスに関与することが分かった。一方、「英語学習努力」には、「過度の干渉」因子がプラスに関与し、「優しい態度」因子がマイナスに関与することが分かった。したがって、「英語授業に対する姿勢」と「英語学習に対する姿勢」には同じ要因が関わり、「英語学習努力」には、それとは別の要因が関わると言える。「きめ細かな指導」は、英語授業や英語学習に対する姿勢を高める可能性はあるが、「英語学習努力」にはつながらないと言える。また、「優しい態度」が、学習努力にマイナスの関与をしたのは、それが教師側の無関心と捉えられている可能性のあることを示唆する。

▶ 15 : 15 ~ 15 : 45

A Needs Analysis: How Teachers Perceive Teacher Training for English Education at Elementary Schools

KAWANAMI, Sachiyo (Kurume University)

KAWANAMI, Kazuya (Ohori Senior High School)

In 2006, MEXT announced the implementation of English education at all public Japanese elementary schools as a compulsory subject. In 2008, its guideline was designed and proposed. Under the guidance, English education has been initiated and provided to the students of fifth and sixth grade one hour per week. Classroom teachers who have not been trained as language (English) instructors are required to teach classes. Due to inadequate and insufficient teacher training, however, tremendous anxiety and disorder have arisen and are expressed among teachers concerned. Given the fact that few of currently employed 416,000 elementary school teachers across the nation have had opportunities to receive formal training for teaching English (Kelly, 2002), it is problematic for its successful implementation. We would like to shed light on current teachers' perceptions of needs for teacher training for English education at elementary schools, providing some insights for further design of an ideal teacher training.

▶ 15 : 50 ~ 16 : 20

Baby car, My car, Open car —Foreign Loanwords, Japanese English and Native Speakers' Ability to Distinguish Between the Two

CRESCINI, Anne (The University of Kitakyushu)

Since the end of World War II, Japan has been taking loanwords from other languages, particularly English, at an amazing pace. Now, it is estimated that 10% of the Japanese language is loanwords of a non-Chinese origin. However, along with authentic loanwords, there is a new phenomenon known as "Japanese English," words or phrases that sound like English, but in reality their usage by Japanese speakers is different than by native English speakers. With the daily addition of new English loanwords alongside new Japanese English words, can a native Japanese speaker tell the difference between the two?

By analyzing a survey given to 84 native Japanese speakers living in the United States, this paper aims to show three things; first, that the longer a native Japanese speaker lives in the United States, the greater his or her ability is to distinguish real English loanwords from Japanese English; second, that there are some words that even long-term U.S. residents are unable to distinguish; lastly, this paper will show that often acquisition of the ability to distinguish between the two comes with a felt need to use that vocabulary word in daily life. Through this study, this paper hopes to raise awareness of the rising number of Japanese English words and phrases entering the Japanese language, and the ability to distinguish real English from Japanese English is important if one wants to truly master everyday use of the English language.

■ シンポジウム

▶ 16:20～18:00 (1号館 3階 1301教室)

テーマ：こうすればできる！小学校外国語活動

コーディネータ：高橋 美由紀 (愛知教育大学)

コメンテータ：金森 強 (松山大学)

パネリスト：池浦 真理 (元福岡市立小学校教諭・
「英語で楽しむ紙芝居研究会」代表)

橋口 公一 (福岡教育事務所教育指導室・主任指導主事)

前田 陽子 (熊本大学教育学部附属小学校)

2011年度から小学校の英語は高学年生を対象に「外国語活動」として必修化されました。この外国語活動の目標としては、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と掲げられています。また、外国語活動の指導は、担任教師が主導で行っていますが、ALTや英語専任教師等と担任教師のチーム・ティーチングでの指導も多くみられます。そして、担任教師の中には、「英語の発音に自信が持てない」「コミュニケーション能力の素地を育成するために、何をどう教えればよいのかわからない」等の不安感をいだきながら指導している例も少なくありません。

また、これまで小学校では、2002年度に新設された「総合的な学習の時間」の枠組みの中の「国際理解教育」の一環として「英語活動」が実施されていました。したがって、「小学校の英語活動」は、「中学校の総合的な学習の時間」へと繋がっていました。一方、「小学校外国語活動」は、教育課程上、「第5学年及び第6学年において、それぞれ年間35単位時間の授業時数を確保する」、「英語を取り扱うことを原則とする」と位置づけられました。そのため、「小学校外国語活動」から「中学校の英語教育」への円滑な接続が求められており(文部科学省2008:45)、小中連携の英語教育が喫緊の課題となっています。

本シンポジウムでは、上記のパネリストの先生方に、小学校外国語活動について、それぞれのお立場から、現在、小学校外国語活動で課題となっている点を取り上げて、その課題について「こうすればできる！小学校外国語活動」のご提案をして頂きたいと思っています。

前田先生には、「ことばを大切にする授業実践を通しての活動」、池浦先生には、「適切な教材や評価と、小学校外国語活動に関わる先生方が自信をもって子ども達と共に学習に取り組むことができる方法」、橋口先生には、「小中連携の課題や、指導に自信がないという小学校の先生についての指導法」等、小学校の担任教師が自信をもって外国語活動の授業を進めていけるように、その内容や方向性に焦点を当ててご発表して頂きます。

子ども達を楽しめる英語活動をめざして

池浦 真理 (元福岡市立小学校教諭・英語で楽しむ紙芝居研究会代表)

1. 外国語活動必修化への流れと私が取り組んできたこと

平成10年の学習指導要領の改訂により、小学校の教育課程に総合的な学習の時間が創設された。その趣旨に沿って児童の興味・関心に基づく課題や地域・学校の特色に応じた課題について、国際理解などの学習内容の展開が始まった。私が当時勤めていた小学校では総合的な学習の時間の授業研究に取り組んでおり、アメリカやオーストラリアの小学生と子ども達同士の交流があり、今の英語活動につながるような授業づくりを行っていた。その後勤務した小学校は留学生など外国の方々が在住する国際色豊かな地域にあり、英語活動への取り組みにも積極的で、同僚の先生方と共に単元開発や教材づくりの研究を行なった。

韓国等と比べ予算や準備期間が限られた条件下での必修化であるが、英語活動は今年度ゼロからスタートした訳ではなく、すでに英語活動を支えるのに十分な教師の資質や、地域の優れた人材や教育機関の支援などの蓄積があると考えます。

2. 現場の先生方の声から

今回、小学校英語活動にいろいろな形で携わっておられる方々へのインタビューを通して、以下のような問題点が挙げられる。私の体験からいくつか手掛かりを述べたい。

- ・子どもが英語でコミュニケーションをとりたくなる活動をどのように仕組めばよいか。
- ・歌・チャンツ、ゲーム、絵本・紙芝居、ロールプレイ等を選ぶ視点は何か。
- ・活動目標に対する評価をどのように行なうか。
- ・中学校との連携はどのようにするのが望ましいか。

3. 今後の課題

- ・視聴覚機器や教材の効果的な使い方や開発
- ・大学や教育研究機関との協力体制づくり
- ・現職教員の研修制度および内容と方法、又、小学校教員養成課程における教育の内容と方法

以上三点から、小学校外国語活動に関わる先生方が自信をもって子ども達と共に学習に取り組むことができる方法を探っていきたいと考えています。

小中連携による『英語好き』な児童・生徒の育成

橋口 公一（福岡教育事務所教育指導室・主任指導主事）

小学校外国語活動の実施にあたり、どのような児童・生徒に育てていくかというゴールの共有をしていく必要がある。私は「英語好き」な児童・生徒の育成が根底になければならないと考える。

ところが、ベネッセ教育研究開発センターが実施した第1回中学校英語に関する基本調査報告書によれば、英語は人気のない教科（英語が好きと回答した生徒は25.8%）となっている。こうした実態を踏まえ、今後の連携は非常に重要な意味をもつことになる。

これまでに、福岡県教育センター指導主事、福岡県教育庁義務教育課指導主事、中学校教頭として、県内各地における小学校外国語活動の授業を参観してきた。その経験から、小中連携のより一層の推進を通して、小学校の先生方が自信をもって外国語活動の授業を進め、指導の方向性を明らかにしていくことが可能になると考えている。

そこで今回は、以下の3点から提言を行いたい。

1 小中連携のどこに課題があるのか

- ・小学校の実態把握ができないままに中学校の授業がスタートしている
- ・入門期の指導の工夫が不十分で英語嫌いを増やしている
- ・校区レベルの継続的なデータ収集や情報交換ができていない

2 指導に自信がないという小学校の先生は何から始めればよいのか

- ・「英語ノート」に基づいて実施する
- ・中学校の先生やALTとの交流を通して英語を使う楽しさを味わう
- ・ゼロから創ってきた先進校（拠点校）をモデルにした研修を工夫する

3 中学校とのどのような連携が求められるのか

- ・実態把握のための情報共有
- ・指導法、カリキュラム、コミュニケーション活動の連携
- ・評価の考え方の連携

これまでも各地区でモデルとなる優れた実践と数多く出会ってきた。今後こうした成果を教科等研究会をはじめとした組織としての取組へと広げていくことによって、各学校における外国語活動の充実を図っていききたい。

▶ 16:20～18:00 (1号館 3階 1301教室)

人とのかかわりを通して「ことば」への関心をいざなう外国語活動へ 言いたいことを英語でどう言い表すのか 調べたり考えたりする活動の中で

前田 陽子 (熊本大学教育学部附属小学校)

留学生に日本文化を伝えようと、日本語を英語に言い換えていく中で、子どもたちは「英語で擬音語ってどういうんだろう」「僕たちが」と言うなら、男子が言った方がいいのかな?」など、英語や日本語に関する様々な疑問をつぶやいている。

しかし、今の子どもたちが英語に出会うことで、「言葉って面白いな」「日本語って、こういうことだったのか」と改めて言葉の面白さや豊かさに気付いたり、自分が使う日本語を振り返って考えたりするためには、授業で取り上げ話し合わせる疑問を吟味していくことが必要である。

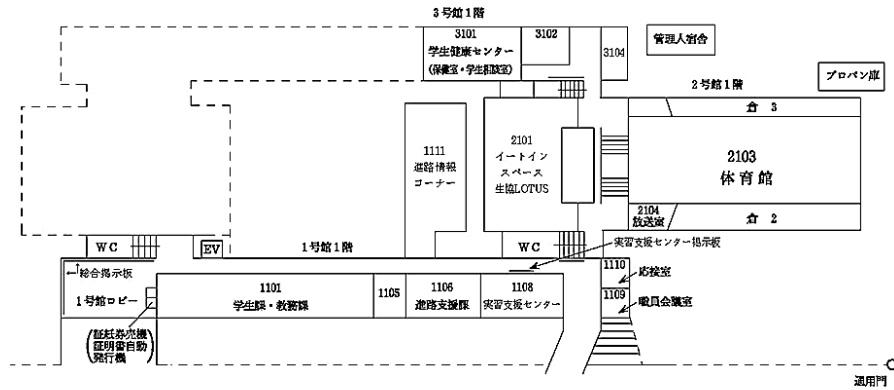
5年時の交流で「担任の先生にどうして‘ホーム’という英語が使われているのだろう。ホームって‘家’だから、家庭教師みたいなのに」という疑問を話し合う際、子どもたちは「ホーム」という言葉について、辞典で調べたり、知っている言葉（野球のホームとアウェイ）などから、「本拠地」という意味で使っているのではないかと考えていくことができた。しかし、それだけでは、言葉のもつ意味の豊かさに気付くことができて、英語と日本語の言葉の意味や使い方の違いをそれぞれの文化やものの見方や考え方と結びつけて考えさせるまでには至らない。また、自分が使う日本語について改めて振り返り、言葉そのものへの関心を高めていくには、英語に触れることでメタ的に日本語を見つめ直していくような活動が必要である。

「日本語の言葉＝英語の言葉」ととらえている子どもたちが、「言語によって、ものの言い表し方が違う」ととらえ直しながら、改めて自分が何をどう伝えたいのか自分自身が話す言葉をも振り返って考えようとしていくような授業実践のあり方を探っていく。

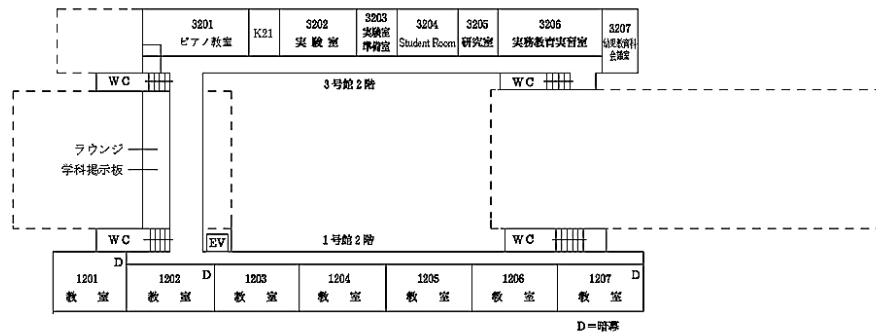


会場配置図

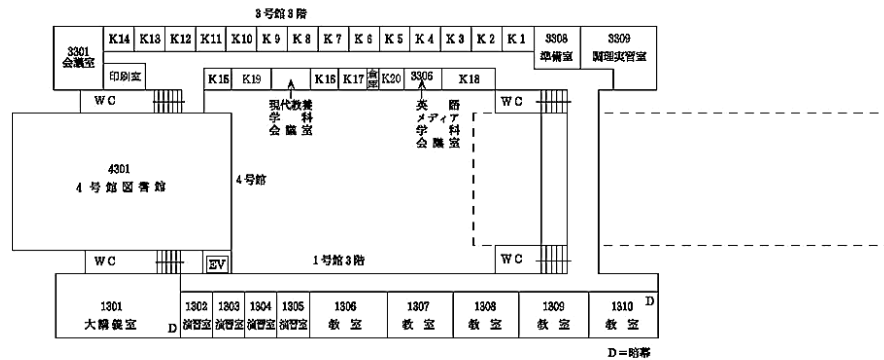
1 F



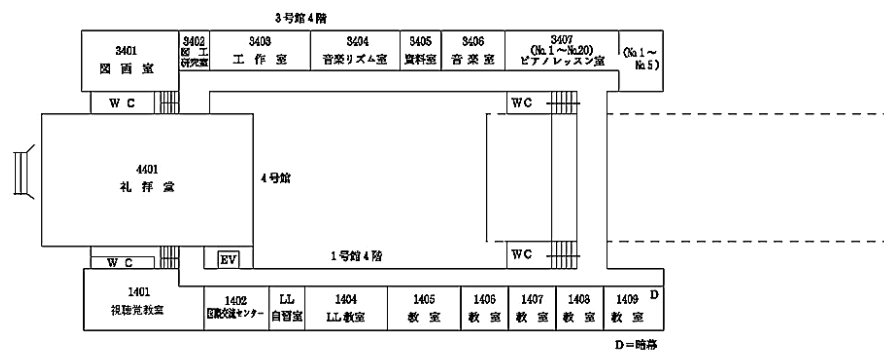
2 F



3 F



4 F



お知らせ・お願い

【資料代】

LET 会員	無料
非会員	1,000 円
非会員（学生）	500 円

【大会受付】

午前 9：30 より 1 号館 1 階のロビーで行います。年会費の受付も合わせて行いますので、お支払いをされる方は受付にお申し出ください。（個人会員・団体会員 6,000 円，学生会員 3,000 円）

【情報交換会】

参加費（会員・非会員とも） 2,000 円

参加を希望される方は、5 月 16 日（月）までに、事務局にお申し込み下さい。

【ワークショップ】

ワークショップは事前申込制です。定員になり次第、締め切らせていただきますので、参加を希望される方は、お早めに事務局までお申し込み下さい。

【昼 食】

昼食は 1 階 2101 イートインスペース生協 LOTUS および 2 階のラウンジでお取りいただけます。学内では、大会当日、昼食類の販売はございません。お弁当が必要な方は、5 月 16 日（月）までに事務局にお申し込み下さい。なお大会当日、生協は 14 時まで営業しております。

【休憩コーナー】

ご休憩の際は 2 階ラウンジをご利用ください。

【喫煙について】

全館禁煙となっております。喫煙コーナーは、中庭に設置されております。

【交通アクセス】

■ 西 鉄

- ・ 二日市駅下車 太宰府方面乗り換え 太宰府駅下車 徒歩約13分
福岡（天神） → 二日市 特急12分
久留米 → 二日市 特急16分
二日市 → 太宰府 普通 5 分
- ・ 太宰府駅下車 西鉄バス「筑紫女学園大学前」下車 徒歩 5 分
- ・ 五条駅下車 徒歩15分

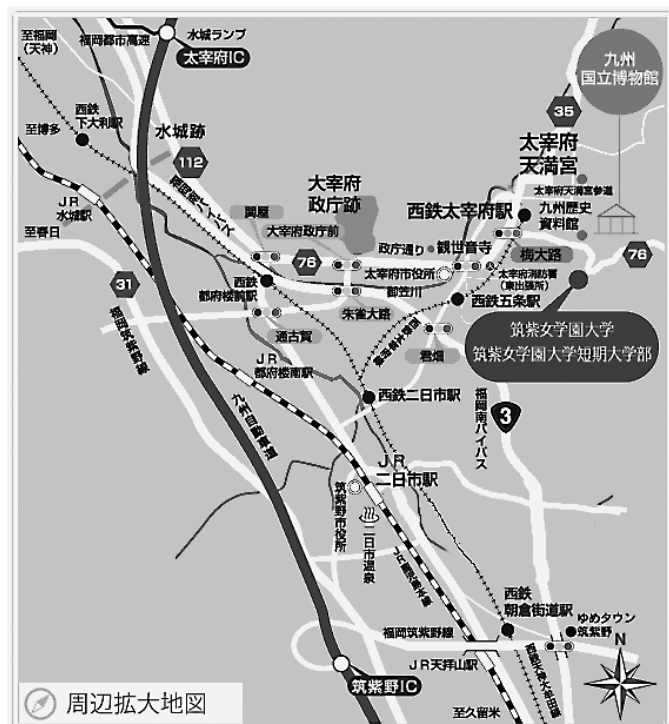
■ J R

- ・ 二日市駅下車 西鉄バス「筑紫女学園大学前」下車 徒歩 1 分

＜西鉄バス時刻表＞

時間帯	西鉄太宰府駅発 (行き先番号 1-2)	JR 二日市駅発 (行き先番号 1-2)
8 時	33	37
9 時	08	49
10 時	33	49
11 時	33	49
12 時	33	49
13 時	33	49
14 時	33	49

本時刻表は、2011 年 5 月 2 日現在のものです。最新の時刻表につきましては、西鉄バスのホームページ等をご覧ください。



＜注意＞

- ・ 大会当日は筑紫女学園大学のスクールバスは運行していません。
- ・ 会場には一般車向け駐車場がございませんので、公共の交通機関を使ってお越しください。

キャンパスマップ

キャンパスマップ

1 1号館

教室 (1201 ~ 1409)
1F 学生課
1F 教務課
1F 進路支援課・進路情報コーナー
1F 実習支援センター(実習支援課)
4F 視聴覚教室
4F LL 自習室
4F LL 教室
4F 国際交流センター

2 2号館

1F 生協(LOTUS)
1F 体育館
B1 保育実習実習室
B1 クラブ室

3 3号館

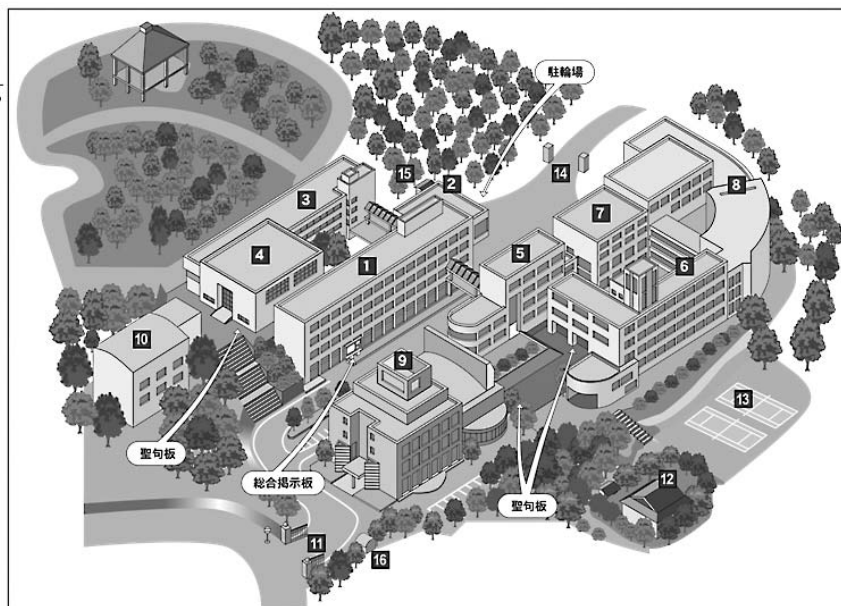
教員研究室 (K1 ~ K21)
1F 学生健康センター
(保健室・学生相談室)
2F ピアノ室 (3201)
2F ロッカー
2F 実習室・準備室
(3202・3203)
2F Student Room (3204)
2F 教員研究室 (3205)
2F 実務教育実習室 (3206)
3F 調理実習室 (3309)
4F 音楽室・音楽リズム室
4F 工作室・図画室

4 4号館

2F ラウンジ
3F 4号館図書館
4F 礼拝堂

5 5号館

教員研究室 (K59 ~ K81)
2F 点検課・生体学習課
2F 法人本部



6 6号館

教室 (6101 ~ 6405)
4F 教員研究室 (6401)
4F Student Room (6408)
1F ~ 4F ロッカー

7 7号館

1F 生協食堂 PLUM Cafe
(アラムカフェ)
2F 教員談話室
2F 非常勤講師控室
2F 人間文化研究所

8 8号館

教室 (8101 ~ 8305)
教員研究室 (K82 ~ K100)
1F 介護実習室
1F 福祉実習室
2F Student Room (8206)
2F 院生研究室 (8207)
3F 8号館図書館

9 飛翔会館

文化クラブ室 (2~4F)
1F 入試課
1F 生協食堂 SMILE (さみれ)
2F コンピュータ実習室 1・2
2F コンピュータ実習室 1・2
2F 情報メディアセンター
(情報メディア課)
3F スクワーズアティール・ホール

10 研究棟

教員研究室
(K101 ~ K129)

11 正門 12 茶室「悦目亭」 13 テニスコート 14 通用門 15 管理人宿舎 16 門衛室

問い合わせ先：

〒 808-0135 福岡県北九州市ひびきの 1 - 1
北九州市立大学 長 加奈子研究室内
LET 九州・沖縄支部事務局

電話 093-695-3249

Fax 093-695-3324

E-mail: secretariat@j-let-ko.org

第41回 支部研究大会実行委員長

田 口 純（筑紫女学園大学）

第41回 支部研究大会実行委員

木 下 正 義（西南学院大学非常勤）

川 尻 徳（久留米工業大学非常勤）

松 崎 徹（筑紫女学園大学）

大 藺 修 一（九州産業大学）

與古光 宏（九州産業大学）

2011年5月20日 発行

編集・発行 外国語教育メディア学会（LET）九州・沖縄支部

代 表 者 島 谷 浩

発 行 所 外国語教育メディア学会（LET）
九州・沖縄支部事務局
〒808-0135 北九州市若松区ひびきの1-1
北九州市立大学 長 加奈子 研究室
T E L : 093-695-3249
F A X : 093-695-3324
E-mail : secretariat@j-let-ko.org

印 刷 平和タイプ・プリント社
